あみたん娘 The NOVEL

33

酒井 直行

3章『あみたんの謎』2

黒蜜ちゃんは雲の中に完全に消えてしまった。途端に、空を覆っていた雲が晴れ、星がまたたき始めた。

「私たち、勝ったの？」。カノンがセシルに尋ねた。

「負けたんでしょ」。セシルが答えた。

「負けちゃったのかあ……じゃあ、あのイケメン三鷹さんには会えないんだね」。カノンが少し残念そうに唇を尖らせた。

「そんなことより、ねえ、彼女が言った最後の言葉……」。セシルが小声でカノンに囁いた。

「うん。私たちの誕生日のこと。同じじゃないってどういうこと？　だって私もカノンも、8月28日が誕生日なんだよ」

「だよね。全然意味不明だったよね」。カノンも不思議そうに首を傾げ、そして空を見上げた。「ねえ、あみたん。あみたんはどう思……」。あみたんに聞きかけたが、彼の姿はもうそこにはなかった。

「ッタク。肝心な時にはいつも消えちゃうんだから」。2人はため息をついた。

キャラクター原案　松原 秀典
イラスト　那智 泉見

翌日は2学期の始業式。かのんとせしるがそれぞれの小学校に登校すると、女子生徒の間では、昨日のアイドルオーディションの話で持ちきりだった。昨夜からのテレビのローカルニュースと今朝の新聞紙面で大きく取り上げられたせいだった。

「可愛いね、あみたん娘」

「私はセシルっていう子がいいかな」「そう？　私はカノン派よ」

同級生が自分たちの噂で盛り上がっているのを眺めるのは不思議な気分だった。

だけど。かのんもせしるも、別のことで頭がいっぱいだった。

放課後。2人はすぐに学校を飛び出し、市役所の正面玄関前で待ち合わせた。自分たちの誕生日が本当に同じかどうかを調べるため、住民票を取るつもりだった。

とはいえ、小学生の彼女たちは、どうやったら住民票を手にできるのかが分からない。市役所のどこに行って、どんな手続きをすればいいのか皆目見当もつかず、不安げに立ち尽くすだけの2人の目の前に、見知った顔が通り過ぎる。家祭誠だ。かのんが思わず家祭を大声で呼んだ。「家祭さん！」

振り返った家祭が怪訝な顔で問い返した。

「誰？」